

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370001

研究課題名(和文) アリストテレスの様相存在論の研究

研究課題名(英文) The Study of Aristotle's Modal Ontology

研究代表者

千葉 恵 (CHIBA, KEI)

北海道大学・文学研究科・教授

研究者番号：30227326

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：アリストテレス存在論の中心に存在者の在り方、様式の理論がある。従来「現実態と可能態」という判別のもとに高校の倫理の教科書においても紹介されてきたが、「完成(entelecheia)」の概念が「実働(energeia)」の概念と癒着されてきたためであると、その考えが誤りであることを立証した。彼は三つの存在様式をロゴスとエルゴンという視点から提示している。「完成」は未完の力能(dunamis)とその実働の組と完成した待機力能とその実働の組を判別するものとして「統帥的な仕方で一かつ在ること」を意味している。彼の自然の因果論的研究である質料形相論がこの様相存在論により理論的基礎づけられる。

研究成果の概要(英文)：Aristotelian ontology consists in his study of modes or ways of being called 'modal ontology'. Hitherto, this study has been misunderstood by conflating the notion of 'completeness (entelecheia)' and 'at-work-ness (energeia)' which is even taught in the Ethics text book of high school as 'actuality-potentiality' dichotomy. I have argued that the three modal notions (completeness, at-work-ness and power-ability) are introduced from both Logos (formation of unified account) and Ergon (based on the observation here and now) perspectives. 'Completeness' which is defined as 'the unity and to be in the governing way' has the role of distinguishing the at-work-ness of incomplete power-ability' from the at-work-ness of completed i.e. the steady power-ability. Aristotelian causal theory of Hylomorphism as the study of nature is founded ontologically by this modal ontology.

研究分野：西洋哲学

キーワード：様相 ロゴス エルゴン 力能 完成 実働 同名異義 定義

1. 研究開始当初の背景

アリストテレスの様相存在論は12世紀に entelecheia (完成)と energeia (実働)双方とも actus (現実態など)と翻訳され、それをトマスが踏襲したことから、大きな混乱のうちに今日に至った。影響力ある研究者たちも多くの場合可能態 現実態の枠組みのなかで議論を展開している。Cf.A.Kosman, The Activity of Being (Harvard UP2013)。それゆえに多くのアリストテレスのテキストの箇所が不明瞭なままに残されている。

2. 研究の目的

1の背景のもとにその知性の混乱を除去することをめざした。そしてそれを事物の一性という存在の在り方をめぐってアリストテレスが「ロゴス」と「エルゴン」に即して探求していることを解明することをめざした。

3. 研究の方法

ギリシャ語テキストの詳細な研究。とりわけ『形而上学』VII-IX巻ならびに『魂論』111の翻訳ならびに註解の執筆。

4. 研究成果

積極的な成果がうまれたと理解している。少なくとも、「完成」と「実働」の概念を「力能」の概念との関連において明確に判別、位置づけることができた。「完成」は「「在ること」と「一」が統帥的な仕方では語られる」と規定される。これを規準にして、完成に向かう未完の力能とその実働の組と完成においてある待機力能とその実働の組が判別される。前者は「或る実働」と規定される「運動」であり、後者が「実働」である。

アリストテレス哲学の一特徴は、存在と生成のアポリア解決案として類義語をセットにした思考の展開により、理(ロゴス)が働き(エルゴン)において確認できた働きが理に裏付けられるその「共鳴和合(sunōdoi)」(NE.1172b5)にある。「在る」は、[L]力能および完成に即して(kata dunamin kai entelecheian)かつ[E]働きに即して(kata to ergon)語られる」(Met.1045b33)。前者[L]は事物の一性を形成する存在様式であり、一性は[L]力能と完成の合成に基づく定義により開示される。後者[E]はその事物の今この力能の実働(能動・受動含む)とその帰結であり、それを把握する魂の認知機能も[E]働きである。連言「かつ」は理が働きに内在し、働きに理が確認される普遍と個別の相補性を示す。

類義語の一方はロゴス[L]の側から提示され、他方がエルゴン[E]の側から提示される。

私は前者を「定義語」と呼び、事物の一性を開示する説明言表の形成において用いられるものであり、後者を「観察語」と呼び、今・この具体的な観察の現場で用いられると理解する。例えば、次の対比を挙げることができる。

[L]「形相(eidos「ロゴスに即した実体」)」
↔[E]「形姿(morphē 質料と形相の統合体の形姿)」

[L]「何かのため(heneka tinos:目的)」
↔[E]「ゴール(telosより先と後が確認される終局)」

[L]「運動(kinēsis 未完の連続体存在者)」
↔[E]「変化(metabolē 二時点に観察される差異)」

[L]「完成(entelecheia 形相の存在様式)」
↔[E]「実働(energeia 力能の今この発現)」

従来両者の相補関係が十全に把握されなかった。理(ロゴス)は、事物の端的な一性を開示する定義の形成を介して、その質料を統一する因果的に基礎的な要素即ち形相としてロゴス上質料から区別され、働き上いわば自然化され構成要素に内在し分離されず、ゴールにおいて形姿として観察される。エルゴン上魂が身体から分離されれば死ぬため、ロゴス上の分離は不可避免的に「同名異義」(412b14)となり、相補的展開が不可欠である(Body-body アポリアはロゴス次元においてのみ対処することから生じる(B.Williams,OSAP4,1986))。

「運動」の[L]定義「力能にあるものの完成、力能にある限り」(Phy.201a10)によれば、運動はロゴス上力能と完成の或る連続合成体として四範疇(実体、質、量、場)に属するが、[E]連続的今このエルゴン(ie.未完の実働)としては三範疇に属し、実体の生成消滅に運動はない(Phy.III1,V1)。変化は二つの今(ek から-eisへ)の具体的な観察に基づき知られるため、非存在からの生成に対応でき(実体生成:t1 端的非存在 t2 端的存在)、運動

の定義の制約(連続体)をカバーできる(V1)。実体の理「形相」(*Phy.*202a9)はエルゴン化され、完成手前の未完の連続体「力能にある実体[胚]から完成にある実体[ヒト]へ」においてゴールに方向付けられた力能の定量化により確認される(*GC.*320a13)。実体ヒトの連続体運動は受精卵が分裂し量的に増え移動する等三範疇のみに属する。運動が「～から～へ ek-eis」の連続的变化として観察されるのは三範疇のみであるが、形相が可視化される三範疇において実体の運動の存在は確認される。理(形相、定義)は今ここの働きを導きそして働きの視点から補完、確認される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3件)

- (1) 千葉恵「アリストテレスのロゴスとエルゴンの相補性による進化生物学への挑戦」北海道哲学会・北海道大学哲学会共催シンポジウム「生物学の哲学 目的論的自然観および進化論における因果と歴史」『哲学年報』(北海道哲学会 2017 Vol.63、pp.1-26、2017.3。(査読無))
- (2) 千葉恵「アリストテレスの様相存在論 ロゴスとエルゴンの相補的展開」『北海道大学文学研究科紀要』150号、pp.1-157(Left)、2016.12。(査読無)
- (3) 千葉恵「ハイデガー『存在と時間』における三局構造とその背景 全体存在への接近をめぐる信の哲学との対話」『北海道大学文学研究科紀要』149号、pp.1-85(Right)、2016.7。(査読無)

[学会発表](計 4件)

- (1) Aristotle's Modal Ontology –Overcoming Potentiality-Actuality Reading, 'Modal Metaphysics: Issues on the (Im)Possible, organizer Martin Vacek (Institute of Slovak Academy of Science Bratislava 2016.8) (プラティスラヴァ(スロヴァキア))
- (2) アリストテレスの様相存在論におけるロゴスとエルゴンの相補的アプローチ」アリストテレス生誕2400年シンポジウム「アリストテレスの実体論—範疇、様相そして記述的形而上学」提題、北海道大学哲学会・北海道哲学会共催 (2016.7)(北海道大学、北海道(札幌市))

(3) Aristotle's Modal Ontology, Taiwan Metaphysic Colloquim, organizer Chin-Mu (Taiwan National Univeristy 2015.11) (台北(中華民国))

(4) Aristotle on Heuristic Inquiry and Demonstration of What It is, 'Philosophy and History Ideas Workshop' organizer Aiste Celkyte (Yonsei University Soeul 2015.5) (ソウル(大韓民国))

(5) 「アリストテレス生物学の存在論的基礎 生命の働きに内在するロゴス(魂)のエルゴン上の不分離とロゴス上の分離」『哲学史から見た生命・生物:アリストテレス、デカルト、ライプニッツ』(松田毅教授(神戸大学)主催による研究会(京都大学楽友会館 2017.3.17)(京都大学、京都市(京都市))

[図書](計 1件)

- (1) (共著)「時間とは何か—クロノス(運動の数)とカイロス(永遠の徴)—」pp.217-247、田山忠行編『時を編む人間 人文科学の時間論』総頁数 255頁、北海道大学出版会 2015年8月

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

千葉 恵 (KEI CHIBA 北海道大学・大学院文

学研究科・教授)

研究者番号：30227326

(2)研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3)連携研究者

なし ()

研究者番号：

(4)研究協力者

Martin Vacek (Institute of Slovak Academy of
Science Bratislava)

Chin-Mu (Taiwan National Univeristy)

Aiste Celkyte (Yonsei University Soeul)

Kevin Flannery (Gregoriana University Rome)

網谷祐一(AMITANI YUICHI 東京農業大学生
物産業学部・准教授)

森元良太(MORIMOTO RYOTA 北海道医療
大学・専任講師)

中畑正志(NAKAHATA MASASHI 京都大
学・文学研究科・教授)

北郷彩 (KITAGO AYA 北海道大学文学研
究科・専門研究員)

松田毅 (MATSUDA TSUYOSHI 神戸大学・
文学研究科・教授)